

## 論文要約

# 近代地方都市における遊廓の形成と地域社会

## —貸座敷・娼妓・遊客の視点から—

加藤 晴美

本研究の目的は、近代地方都市において遊廓がいかにして形成されたのか、そしてそれがどのような特質をもつのかを、地域社会における貸座敷や娼妓および遊客の存在に着目して明らかにすることである。これを解明するため、近代移行期においてはじめて売春業が導入された地域である山形県米沢、栃木県烏山、神奈川県横須賀という三つの地方都市を事例として取り上げた。

第Ⅰ章「序論」では、研究史を整理することにより本研究の目的と方法を示した。従来の地理学・歴史地理学における売春に関わる空間を対象とした研究では、遊廓や花街の形成を都市の政治的・経済的側面に着目して分析することに主眼が置かれており、売買春をめぐる人々の実態についての関心は希薄であった。歴史学分野では遊廓の社会構造を論じる社会史的研究と、遊女や娼妓など売春女性の存在形態を論じる女性史的研究が別個のものとして展開しており、これらを総合的に議論しようとする研究は乏しい。また、買売春に関与する人々のうち、貸座敷経営者や男性遊客などを対象とした研究の蓄積は少ないのが現状である。こうした点を踏まえ、本研究では近代地方都市における遊廓の形態的側面の検討に加え、従来ほとんど取り上げられなかった貸座敷の経営史料の分析を通じて遊廓において展開した経営・労働・遊興の具体像を示し、それらを総合的に考察する。

第Ⅱ章「近世・近代における遊廓の史的展開」では、近代以降における変化の前提として、まず近世期における地方遊所について概観した。近世後期には、ほとんどの遊所は港町・宿場町・温泉場などに分布しており、近世期における流通・交通ネットワークの成立とそれとともに地方経済の発展が、地方遊所の成立に影響したと考えられる。また、これらの遊所の多くは周囲を囲繞された「廓」の形態をもたず、地域社会のなかに「閉ざされない」空間として存在していた。

幕末期以降、特に明治前期において遊廓は急激に増加し、大正期までに小規模な遊廓が多くの地方中・小都市に普及した。これにより近代以降、郡役所所在地など郡域レベルでの中心地や、それより狭い範囲での小中心地などにも遊廓が立地し、大都市に居住する男性だけでなく、地方小都市や村落部に居住する多くの男性にとって、自らの生活行動圏内に遊廓が存在するという状況が広く成立した。また、近代公娼制度の確立期とされる明治 33 (1900) 年前後より、多くの地方都市において中心市街地に遊廓や貸座敷が散在することが問題視されるようになり、集娼化のため都市周縁部において周囲を囲繞した遊廓を新設する動向

が加速した。それは隔離と集娼という近代公娼制度の基本理念を反映した「閉ざされた」空間としての「近代遊廓」が、地域社会において成立したことを意味する。

第Ⅲ章「明治前期米沢における遊廓の形成と貸座敷の存立」では、山形県米沢を事例とし、旧城下町において従来の生活基盤が変化するなか、投機的な関心をもった新興経営者らが貸座敷業に次々と参入していくプロセスを明らかにした。ここでは米沢において営業した貸座敷「東楼」の史料を分析することにより、娼妓は「芸娼妓解放令」以降も年季と前借金に制約された労働形態を維持し、生家を経済的に支えていたことを示した。それらの娼妓のなかには、新潟周辺から米沢東楼に送り込まれた娼妓や、東楼から旧山形城下の貸座敷へ住み替える娼妓がみられた。その背後には特定の周旋業者を介する、藩領や県境を越えた広域的な身売りのネットワークが存在しており、娼妓らはこれによって都市間を移動していた。また東楼における遊客名簿の分析から、東楼は米沢の市街地に居住する男性によって活発に利用されており、遊廓所在地域の都市居住者による日常的な貸座敷利用が一般化しつつあったことを示した。

第Ⅳ章「大正期烏山における遊廓の展開と遊客・娼妓の存在形態」では、地方小都市の事例として栃木県烏山を取り上げ、烏山旭遊廓で営業した貸座敷「福二楼」における経営状況を考察した。烏山において明治初期に設置された飯盛旅籠を起源とする貸座敷は、烏山市街地南端において住民の生活空間のなかに散在していた。これに対し、明治34（1901）年に開設された旭遊廓は、地域住民の生活空間から貸座敷を完全に切り離れたうえで「廓」を形成し、外界から隔離された空間を形成した。貸座敷福二楼の史料からは、大正期の烏山では、都市居住者のほか近郊村落の農村居住者や中・下層労働者によって貸座敷が活発に利用されていたことを明らかにした。遊客による支払いの状況を記録した「酒食台帳」の検討からは、福二楼の遊客らは貸座敷利用の際に飲食物や芸妓などに支払う遊興費用を抑え、娼妓を対象とした買春行為に特化した遊興を安価に行う傾向があったことを示した。こうした遊客の増加と遊興費用の低額化に対して、貸座敷側は娼妓の接客数を増加させることによって対応した。娼妓の収支を記録した計算帳からは、大正期地方都市の貸座敷において娼妓の労働負担が大きくなり、それによって病気感染のリスクと、病気療養のための医療費負担増といった悪循環に陥っており、娼妓の労働環境が悪化していたことが判明した。

第Ⅴ章「軍港都市横須賀における遊廓の形成と開発者」では、海軍鎮守府が置かれた軍港都市であった横須賀を事例として遊廓の展開を考察した。横須賀は近世後期まで半農半漁の村落であったが、幕府による製鉄所の建設によって近代以降急速に都市が拡大した。幕末期、横須賀では製鉄所に招聘されたフランス人技師らの要請によって外国人遊参所の設置が決定し、地域の有力者らによって宇大滝における遊廓の開発とそのための埋め立て工事が行われた。ここでは遊廓の開発者の一人であり貸座敷の経営も行った永嶋庄兵衛家の史料を中心に遊廓の開発過程を検討した。これにより、既存の家業を通じて幕府・奉行所との密接な関係をもつ永嶋家はそのつながりを活かして遊廓開発に参入し、完成後の遊廓区域

における地代・家賃による収益確保を目的の一つとして自費を投じた開発を行ったことを示した。海軍鎮守府開設以降、大湊遊廓が軍港に近い位置に立地することが軍事的に不適切とされ、近代遊廓である柏木田遊廓への移転が実施された。都市周縁部に位置する柏木田遊廓は主に海軍兵士や海軍工廠の職工らによって利用され、軍隊と遊廓との強い関係性を示している。これによって、幕末期以降に都市化が進展した横須賀では、遊廓開発は都市開発の機運に呼応して行われたものであったこと、さらに横須賀の軍事都市化によって遊廓が軍港に近い中心市街地から排除される一方、利用の側面では軍隊とのつながりを深め、軍隊に依拠した遊廓が存立したことを指摘した。

第VI章「近代地方都市における遊廓の展開とその特質」では、本研究で事例とした米沢・鳥山・横須賀の三都市における遊廓の形成過程を比較し、その地域的差異を踏まえたうえで近代遊廓の特質を検討した。ここではまず三都市における遊廓の形成過程の検討により、幕末期以降、近代遊廓確立までには三つの段階があることを示している。一つ目の段階は幕末期から明治初年であり、この時期には各地で外国人居留地に付属して設置された遊廓などが出現した。二つ目の段階としては、明治5(1872)年の「芸娼妓解放令」以降、明治20年代後期までの時期が挙げられる。この時期には遊廓数が急激に増加し、地方の中・小都市にまで遊廓が普及した。三つ目の段階は明治30年代以降であり、この時期には近代公娼制度が法的に確立し、さらに多くの地方都市において近代公娼制度の原則とされる隔離と集娼を実体化した「閉ざされた」空間としての近代遊廓が形成された。こうして形成された諸都市における近代遊廓の景観と空間構造には共通点があり、遊廓の入り口に大門を設置し、そこから遊廓奥部に向かって直進する幅員の広い街路の両側に街路樹とともに貸座敷などが配置されている。これは明らかに近世期から三都の公許遊廓として別格の扱いを受けた新吉原遊廓を模倣したものである。しかしながら、模倣にあたっては実際の新吉原遊廓に存在した下級遊女屋による低級な売春の空間は省略され、華やかで格式の高い遊興を象徴するメインストリート周辺を中心とした模倣が行われた。これは近代遊廓を開発するにあたって、新吉原がもつ華やかなイメージを援用した空間が構築されたためと考えられる。

一方、華やかな景観を目指した近代遊廓内部において展開した遊興や娼妓労働の実態は、華やかさとは大きく異なるものであった。大正期以降、買春は日常的な空間内部で行われる大衆的な行為となり、買春の主体は村落居住者や下層労働者にまで拡大して遊客数は著しく増加した。その結果、遊客が貸座敷において支払う遊興費用は低額に抑制され、買春のみを目的とした遊興のあり方が拡大した。娼妓らは遊客数の増加にともなって接客数が増大し、さらに医療費の自己負担によって経済的に圧迫されるなど、劣悪な労働環境の中に置かれていた。

第VII章「結論」では以上の検討を総括し、四つの観点から結論を述べた。一点目は、およそ明治30年代から増加する近代遊廓の成立をもって、近代公娼制度が地域社会における実態レベルで確立したという点である。それは、形態的な側面に着目した場合、近代遊廓の

成立とは「閉ざされない」空間としての近世的な遊廓が近代公娼制度の理念や売春を「好ましくない」とみなす価値観の生成によって「閉ざされた」空間へ変容したことを意味している。

二点目は、近代初頭における「貸座敷業」の登場が地域社会における一つのインパクトとしてとらえられたことであり、地域開発や個人の経済的な飛躍を求める人々の存在によって貸座敷業が地域社会に導入されたことである。貸座敷業に対する「商機をもたらす新時代の事業」としての認識が、幕末期から近代前期において遊廓が地方中・小都市に広く普及するための基盤となったことが重要である。

三点目は、近世期に旅に付随する非日常的な行為として存在した買春が、近代期にはしだいに日常的な空間に導入され著しく日常化・大衆化していくという、買春の質的な変容である。近代地方中・小都市への遊廓の普及は、これらの都市とその周辺地域の住民にとって生活圏内に遊廓が存立するという状況を生み出し、地域住民による日常的な貸座敷利用を活発化させた。遊客らは飲食や技芸に対する遊興費用を抑制し、買春を主目的とした遊興を安価に行おうとしたことが明らかになった。遊客を対象とした既往研究は乏しいが、娼妓と遊客をともに分析の対象とすることによって、売買春が介在する空間を包括的にとらえることが可能となる。

四点目は、大正期までに都市部のみならず村落部までをとらえた買春の日常化・大衆化が、娼妓の労働と生活に大きな影響を及ぼしたことである。特に大正期は遊客数が飛躍的に伸び、娼妓はもっぱら売春に特化した労働に従事するようになり、娼妓の労働負担は増大したと推断される。娼妓の過剰な労働状況は性病感染などのリスクを高め、病気休業と医療費の自己負担が娼妓を経済的に圧迫した。一方で娼妓は借金を返済するために多くの接客をこなさざるを得ず、より厳しい労働環境に置かれるようになったと考えられる。

以上のように、本研究では遊廓の形態的な側面とともに、貸座敷経営者や娼妓および遊客など、地域社会に存在した遊廓をめぐる様々な人々の営みを貸座敷側の史料から示すことにより、これらが相互に関連しながら遊廓の機能を変質させていたことを明らかにした。